

この危機から日本中の教会の宣教協力へ！

「弟子たちは一兄弟たちに一救援の物を一バルナバとサウロの手によって、送った。」

使徒の働き11:28-30

被災地の牧師・教会を支援し、東北復興のお手伝いを！

- ①相模原の牧師・信徒が被災地の現地の教会を訪問し交流する。
- ②牧師とそのご家族の支援をはじめとして様々な関わりをもつ。

#### ★「伊豆・祈りの家“ベテル”」利用開始！

「被災地の先生方に伊豆の温泉でゆっくり休養してもらったら？」というアイデアにぴったりの別荘が、大野キリスト教会の大野修一兄(現・日本同盟基督教団・追浜教会)から提供されました。元々、大野キリスト教会のメンバーに、一人一日9000円で貸し出されていましたが、今回は、被災地の先生方には無料で泊まって頂き、費用は「ミッションみちのく」が負担するという形で支援することにしました。2月の末には、岩手の牧師家族が、春休みには、いわきの牧師家族が滞在し、「久しぶりに家族でゆっくり過ごし、疲れが癒されました」と喜んでおられました。私達が出来ない働きを被災地の先生方はしておられる。その先生達を、私達がこんな形で応援できるのは、感謝な事です。

「伊豆・祈りの家“ベテル”」が、東北の先生方の癒しの場として用いられるようお祈りください。

#### ★被災地の教会と講壇交換開始！

2月26日(日)いわきの内郷キリスト教会の金成先生と京浜キリスト教会の沼澤先生に講壇交換をしていただきました。(金成先生の交通費と宿泊費を“ミッションみちのく”で負担)相模原の教会にとっては、現地の先生から直接お話を聞いて支援しやすくなりますし、被災地の先生にとっては、被災地を離れるだけでもリフレッシュになるようです。従って今後この形が用いられるのではないかと期待しています。是非先生方のご協力よろしくお願いします。

#### 被災地との係わり

京浜キリスト教会 沼澤克巳

今年に入ってから、被災地、特に福島県の教会と係わる機会が与えられたので、報告させていただきます。

一つは、1月23日(月)に開かれた福島県キリスト教連絡会(FCC)の集会に、田園教会の鈴木手以師と共に出席したことです。会場は、福島県の中通りの南部に位置する須賀川市の日本イエス・キリスト教団東北宣教センター須賀川シオンの丘というキャンプ施設でした。午前中に着いて、「福島県放送伝道支える会」の会合を傍聴させていただきました。この会が40年の歴史を持ち、今回のFCCの元になっているとの事。伝道番組の反応に対する細やかな報告や対応を伺い、宣教が困難な日本の地方にて、息の長い様々な形の伝道活動がなされていることを改めて知らされました。

午後からのFCC集会には、福島の先生方(10名程)の2倍近くの方々(各ボランティア団体の皆さん)が出席されました。それだけ、皆さんが福島の地に対して重荷を持っておられると感じました。地震、津波による被害に加えて、福島の地に大きく押し掛かっているのは、やはり放射能汚染のことでした。短期的にはもちろん、長期的にも復興の見通しが立たない現実を突きつけられて、他の被災地にはない重苦しさを感じざるを得ませんでした。





しかしそのような中で、主を見上げつつ、自ら被災者でありながら、支援活動が続けておられる先生方、また教会のために、主の御助けを祈りつつ、私たちにできる支援をさせていただきたいと、強く感じたことでした。現地のある先生が言われていた「福島の住民が、再び郷里を誇れるようになることを祈っている」との言葉が心に残りました。

二つめに、福島県いわき市の内郷キリスト福音教会との講壇交換について報告します。上記の会合で、約25年ぶりに神学院の後輩の先生と再会しました。それが、内郷教会の金成孝悟師でした。今回のミッションみちのくの活動がきっかけとなって、

相模原といわきの講壇交換を行うことになり、2月26日にいわき市でご奉仕させて頂きました。内郷教会は海からは離れていますが、地震の影響で地盤が7センチもずれて、会堂の壁には何箇所かヒビが入っていました。そのような中で、愛兄弟方が信仰生活を守っておられます。また、イースターに向けて2名の方々が受洗準備会に臨んでおられ、御名を崇めた次第です。帰路、海岸沿いの道を回ってきましたが、あの南三陸のように津波の被害を受けた場所を見て、今回の被害がいかに広範囲であったかを実感しました。また相模原でご奉仕をお願いした金成師によって、教会員に被災地の現状が伝えられ、一同重荷を持ったようでした。つい先日(4月1日)も、被災地に支援物資を届けようと、姉妹方が日帰りで現地の礼拝に出席してきました。

このように、今回の震災は大変な惨事でしたが、このことがきっかけとなって、教会間の交わりが生まれ絆が結ばれたことは、そこに神の国の一端を見せて頂くという、広い意味で主の許しの中の出来事であったと思われています。今後も、この絆を保ち、祈りと交わりを継続していきたいと願っています。



## 被災地ボランティア報告

田園教会 鈴木手以

3月12日(月)～15日(木)まで、仙台七ヶ浜のサマリタンズパースのボランティアにカンバーランド長老教会の仲間たちと参加してきました。メンバーは、私、鈴木と金指崇長老(田園)、古畑仰兄、古畑由実姉、伊能悠貴中会神学生(高座)、仲山茉莉姉(国立のぞみ)の6名でした。

七ヶ浜での奉仕は、私は二度目でした。1年が経った今も、海岸付近は土台だけとなった建物や曲がったままのガードレールなどが多く目につきました。そうした地域にあって、サマリタンズパースは、被災家屋の泥出しや修理を行い、その数は150軒に達するとのことでした。多くの物資と尊い働きは、米国をはじめとする教会の献げ物によって支えられているそうです。

アメリカ、カナダ、オーストラリア、韓国、ハイチなど世界中からクリスチャンたちが、日本まで来て、多くの時間を献げてくださっています。色んな国のクリスト者たちと、共に祈り、交わり、心を合わせて奉仕することができることは、私たちにとっても喜びです。私たちが朝、車で彼らと共に現場に向かおうとする時、登校中の小学生たちが外国人の運転するワゴン車に手を振っていました。彼らの心の籠もった奉仕が、地域の方々の心に届き、感謝されている姿を見させていただきました。

二日目の午前中、私たちは作業を切り上げ、修理の完成したお家の祝福式(dedication)に参加させていただきました。サマリタンズパースでは、修理を終えたお家の家主の方にお家を引き渡す際、聖書を渡し、祝福を祈るようにしています。聖書の裏表紙には工事に携わった大工やスタッフ一同のサインが書かれています。賛美を歌った後、大工たちが、この家の修理やご家族との思い出を語り、津波により家や親類を喪くされたという地域の牧師がメッセージをしにくささり、さいごに家主のご家族がお礼の言葉を述べられました。

家主のYさんは、住宅建設のお仕事をされているため、被害を受けたお客様の家が優先で、自宅の修理は休みの日に少しずつやるしかなかったそうです。自分たちで広い家の泥出しなど行っているうち、疲労困憊してしまって前に進めなくなり、仕事を通して知り合っていたサマリタンズパースのお手伝いをお願いすることに決めたということでした。

工事の始まったころ、ご家族は、またいつ次の津波が来るかと不安で、ラジオを肌身離さず抱えていたそうです。しかし、サマリタンズパースの支援を通して、神様が世界中から天使たち（助け手）を送ってくださった、と喪失だけでなく、大きな慰めと癒しを経験して、今は津波に怯えてはいない、と平安を口にしておられました。サマリタンズパースの心の籠った働きが、家を直すことにとどまらず、被災した家族の心をも慰め力づけているのを知ることができました。何かがあるから安心というのではなく、神様が、自分たちのことを心にかけてくださり、これから先も折にかなった助けを与えて下さるだろうという漠然とした安心感。それは信仰の歩みにおいても大切なものだと思われました。

また、10月に私たちが泥出しのお手伝いさせていただいたお家も近くに見えましたので、そこにも寄らせていただき、家主の方とペットのワンちゃんとも再会することができました。その地域は、うちもお願いしたいとの申し出が続き、今では、ご近所中、サマリタンズパースによって修理・再建されたお家だらけとなっています。まだ水道が直ってなかったり、色々と不便もあるようですが、地域で励まし合って暮らしておられるようでした。

今回も皆さんの祈りと支えの中で、ボランティアに参加することができ、働きが守られたことを感謝しております。サマリタンズパースは4月末までボランティア活動を続けるそうです。まだまだ、多くの助け手を必要としていますので、ぜひ、皆さんにもお力を貸していただきたいと願っています。



(『シャローム』3月4日、4月1日発行号に掲載の「第四回被災地訪問<一><二>」より抜粋させていただきます。)

2月24日(金)～26日(日)、第四回目の被災地訪問がありました。その恵みと出会いを二回に分けてご報告します。  
(文・布川祐美)

今回の訪問は、南三陸町と気仙沼を中心に、足を延ばせば、陸前高田市も訪問する予定を立て、総勢八名にて出発。私もその中の一人として初参加しました。

初日、東北道をひた走る中、仙台市などの状況も見られればということで、仙台から松島、東松島市を通るルートを選びました。仙台市内は、以前訪問された方の話では、当時残っていた瓦礫などはきれいに片づけられているとのことでしたが、遠くに歯の抜けたように見える松の木々が、津波の巨大さを物語っていました。

その後、松島から東松島市に抜けるローカルな道に入ると、それまで順調に走っていた車が頻繁にガタガタと揺れるようになり、道に亀裂や修復による凹凸が残っている現状を体感しました。

東松島市では、まだ手つかずに残されている建物もいくつもあり、進まぬ現状を目の当たりにするばかりでした。

### 《クリスチャンセンター建設の夢》

その後、キリスト聖協団西仙台教会の中澤竜生先生の案内で、地元の方々が「ぜひ、この地にクリスチャンセンターを。」と提供してくださった土地の視察に、南三陸町に入りました。

南三陸町はご存知の方も多いかと思いますが、津波による壊滅的な被害を受けた土地です。広大な土地にはわずかな建物しか残っておらず、残されたたくさんの土台が、そこにあった人々の生活を物語り、胸を締め付けました。南三陸町は、瓦礫が集められたり、信号が通ったりはしていましたが、復興はあまり進んでいないように思われました。中澤竜生先生の話では政治と昔からの地域の問題で、復興計画がなかなか前へ進まないそうです。

まずは志津川高校にほど近い「第一クリスチャンコミュニティセンター(仮称)」予定地へ。こちらは期限付きですが、地域の方々からの声によってプレハブ仮設による施設を作る話が進んでいるとのこと。 (~略~)

キリスト聖協団西仙台教会は、初日に南三陸町を案内してくださった中澤竜生先生が牧会されている教会で、この教会をベースに震災当初から多くの被災地支援活動をされています。

若者の賛美に始まった礼拝では、中澤竜生先生が被災地支援を通したメッセージをお話してくださいました。

その中で南三陸町に建設予定のクリスチャンコミュニティセンターに被災者の皆さんの期待が高まっていることに触れ、「被災者の皆さんの期待とは何か。それはクリスチャンが自分たちに寄り添ってくれることである」とおっしゃっていました。

支援者側の思いが優先される支援ではなく、被災者の皆さんに寄り添って歩むことが求められていると。

初日、中澤竜生先生にお会いした際にこのような話をうかがいました。復興にかかわる企業やボランティアの中には悪い企業、悪いボランティアも多いと。そのために何千万円もの被害を受けた方々もいらっしゃる。地震・津波以外に、更に深い傷を負った方々がいるのだと。

私たちの歩みは小さいですが、イエス様が私たち一人一人に寄り添ってくださっているように、一人一人の皆さんに寄り添う支援ができればと思われました。(以下略)



『ミッションみちのく』へのお祈りとご支援をお願いします。

### ★義援金のお振込み

ゆうちょ銀行 10010 22932431(他行から振込みの場合: 店番 008 普通 2293243)